

## 母マリアによるイエスの物語

井田 泉

あの子は——ほんとうは神の子、私たちの救い主ですが、今はそう言うことにします——初めから不思議な子でした。

出産して 40 日後、私はあの子を抱いて夫ヨセフとともにエルサレムの神殿に行きました。慣習に従って最初の子を神さまに献げるためです<sup>1</sup>。けれども私はほんとうにあの子を、神さまからいただいた子として、神さまに献げる決意で神殿に行ったのです。

そこでシメオンという老人に出会いました。シメオンさんはあの子を抱いて、涙を流しながらこう言ったのです。

「これでもう私は死んで神さまのところに行くことができる。私の目が神の救いを見たのだから。」<sup>2</sup>  
その後、シメオンは私にこう言いました。

「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」<sup>3</sup>

この子は成長して、人々の反対を受け、迫害されることになる。恐ろしいことでした。この子の母となったことで自分も苦しみにあう。けれどもそれが自分に託されたことなら、命をかけてもこの子を守り、神さまに従おうと私は決意したのです。

その後、今度はアンナというおばあさんに出会いました。預言者と言われている人です。アンナさんはあの子を見て、ほんとうにうれしそうな顔をして神を賛美しはじめました。彼女は、エルサレム中の救いを待ち望んでいた人々にあの子のことを話したそうです。この子は人々に希望を与え、神さまの救いをもたらす者となる。自分がその母とされたことを、もったいなく、畏れ多く、しかしこの上なく幸せに感じました。当時アンナさんは 84 歳だったと思います<sup>4</sup>。

ナザレであの子はすくすくと成長しました。賢い子でした。知能が高いというより、もっと本質的な、物事の核心に敏感というか、命と魂を知っているという賢さです。幼いときからあの子の表情や言葉、しぐさや反応にしばしば驚かされました。あの子がそばにいと、恵みの神を感じました。それは私だけではなく、夫もそうでしたし、いろんな人たちが同じことを言っていました。

毎年過越の祭の時には、ナザレの村の人たちと一緒に、エルサレムの神殿に礼拝に行きました。あれはあの子が 12 歳の時です。祭が終わっての帰り道、あの子がいないことに気がつきました。私たちは近所の人たちと親しくしていましたし、あの子ももう律法をわきまえる年齢になっていましたから、道

---

<sup>1</sup> ルカ 2:22。

<sup>2</sup> ルカ 2:29-30。

<sup>3</sup> ルカ 2:34-35。

<sup>4</sup> ルカ 2:37。

連れの中にいるものと思いこんでいたのです。

驚いて 1 日分の道を引き返し、エルサレムを探し回りました。どこにも見つかりません。私たちは気が気ではありませんでした。神さまから預かった大切な子を失ったらどうしようと心配で心配で、食べ物ものどを通りませんでした。

3 日の後、もしやと思って神殿に入ったところ、境内に一群の人たちが座って話をしていました。学者たちが聖書や信仰のことを議論している様子でした。その真ん中に、何とあの子が座って、話を聞いたり質問をしたりしているではありませんか。聞いている人たちは皆、あの子の受け答えに驚き感心していました。

私はあの子に近づいて言いました。

「どうしてこんなことをしてくれたの。ごらんなさい。お父さんも私も心配して探していたのよ。」  
するとあの子はこう言いました。

「ぼくがぼくのお父さんのところにいるはずだと分からなかったの？」<sup>5</sup>

「ぼくのお父さん」と、あの子は神さまのことをごく親しいもののように言いました。それがとても自然な言い方だったのです。けれども私たちはあの子の言葉の意味が、そのときはよく理解できませんでした。

一緒にナザレに帰った後は、あの子は家のことをよくしてくれました。私たちにとっても力になってくれました。特に夫ヨセフが亡くなって後は、あの子は父の跡を継いで大工の仕事をしながら家族の大きな柱になってくれていました。私はずっと後まで、あの時のあの子の言葉を心に留めていました。

ところがイエスは 20 代の終わり頃になると家を離れて、ヨハネのところでも過ごすようになりました。あの、ヨルダン川で洗礼を受けていたヨハネです。ヨハネの影響力は大変なもので、庶民はもちろん、何不自由なく暮らしているエルサレムの有力者やお金持ちの中にも、彼のところに行って洗礼を受ける人たちが続出しました。私はあの子の様子を見に行き、ヨハネが話すのを聞いたことがあります。神が自分に迫ってこられるのを強く感じたものです。あの子はヨハネに非常に共感していたようで、やはりヨハネからヨルダン川で洗礼を受けたのです<sup>6</sup>。

その後、ヨハネは民衆を扇動する危険分子として捕らえられました。それからです。あの子が独自の活動を始めたのは、30 歳の時でした。

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」とあの子は呼びかけていました<sup>7</sup>。

ガリラヤのカナの町で知人の婚礼がありました。婚宴は何日も続きます。私は早くから行ってそのお世話をしていました。イエスと弟子たちも出席していました。私は、大量に用意されていたはずのぶどう酒がなくなっているのに気づきました。このままでは宴が白けてしまい、招待した人たちが恥をかくことになります。私はイエスに「ぶどう酒がなくなった」と告げました。するとイエスは、「女の

---

<sup>5</sup> ルカ 2:49。

<sup>6</sup> マルコ 1:9。

<sup>7</sup> マルコ 1:15。

方、それが私と何の関係がありますか。私の時はまだ来ていません」と言いました<sup>8</sup>。意外な答に驚きましたが、イエスの態度はとても真剣でした。私は召使いたちに、「この人が何か言ったら、そのとおりにしてください」と言いました。

イエスはそこにあった六つの水瓶に水を一杯に満たすように言いました。召使いたちがそのとおりにして、それを運んでいきました。水は非常においしいぶどう酒に変わっていました。「私の時はまだ来ていません」と言ったイエスの言葉は、ずっと私の耳に残っていました。

あの子が考えていること、あの子がしていることは正しいと私は信じていました。あの子の言葉には、真実そのものから来る響きがありました。彼は神と人を、それこそ命を捨てて愛していました。けれどもそれがとても心配でした。何か危険なことになりはしないか。彼は、人々から恐れられている有力者や指導者たちの誤りをはっきりと批判しました。人のことを思うあまり自分の身を守ることを知らないようでした。

事実、あの子の言葉と行動は、もっとも勢力を張っているファリサイ派の憤りを買いました。働いてはならないとされる安息日にイエスは手の萎えた人を癒しました。それは安息日（土曜日）の会堂でのことでした。イエスを訴える口実を得ようとする人々の注目の中で、あの子はこう言ったそうです。

**「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」<sup>9</sup>**

彼らは答えることができず、黙っていました。自分たちが人の痛みや悲しみなど思わず、人を陥れることばかり考えていることがあらわになったからです。人々のかたくなな心に対するあの子の憤りと悲しみを、どれほどの人が理解したのでしょうか。イエスはその人に「手を伸ばしなさい」と言いました。すると、その人の手は元どおりに良くなりました。その時、ファリサイ派の人々は恥じて去ったのではありません。逆に、普段は仲違いをしているヘロデ派の人々と一緒になって、イエスを殺す相談を始めたのです。

イエスが神さまと人々のために働けば働くほど、力ある人たちの憎しみを買うことになりました。これがこの世の現実なのでしょう。イエスのことを「あれは悪霊に取り憑かれている」とか、「悪霊の頭<sup>かしら</sup>の力で悪霊を追い出している」などと、悪意のうわさを広める人たちがたくさんいました<sup>10</sup>。

「どうして身内の者がイエスをほっておくのか」と私たちも責められました。親戚の中には、自分たちの立場が悪くなるのを恐れて、イエスを取り押さえに行った人たちもいました。「あの男は気が変になっている」と評判になっていましたから。

私も、このままではいつイエスが捕らえられるか、いつ命を落とすことになるかと心配で心配で、一度無理にでも家に連れて帰りたいと思い、ほかの子どもたちと一緒にあの子のいる所まで行きました。

---

<sup>8</sup> ヨハネ 2:4。

<sup>9</sup> マルコ 3:4。

<sup>10</sup> マルコ 3:22。

人を頼んでイエスを呼んでもらい、私たちは家の外で待ちました。久しぶりにあの子に会ったのですが、その時あの子の口から出た言葉は次のようでした。

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」<sup>11</sup>

私は衝撃を受けました。自分がどれほど人を気にして中途半端な生き方をしていたか。イエスは、神さまが願われることを自分の願いとして、人の救いのために自分を献げているのです。イエスの周りに集まった人々の間には、平和の光が満ちていました。神の国がここにあることを私ははっきりと知りました。神さまの守りと導きが、私たちのために、今に至るまであったしこれからもあることを、ほんとうにその時私は確信しました。自分が、このイエスとその周りに集まった人たちのために祈り、それを支えていくのだと思うと、不思議な幸せに包まれました。

イエスを愛し、信頼する人々は非常に多くなりました。何百何千という人たちが彼のもとに集まってその話を聞こうとしました。イエスの語る「神の国」は、他の何ものにも代えがたい、命の言葉として響きました。温かく柔らかく自由で真実なものがそこにはありました。

イエスのまわりにはしばしば不思議なことが起こりました。彼によって病を癒された人は数知れないといえます。ある女の人は、イエスの後ろから彼にひそかに近づき、服の房に触ったそうです<sup>12</sup>。そうすれば必ず治ると信じたからです。これは魔術的なものをイエスに期待したことになるかもしれません。癒されたことを感じた彼女は、そのまま黙って立ち去るつもりだったのです。ところがイエスは振り返って、触ったのが誰か探しました。その女の人は恐ろしくなって、ふるえながらありのままを話したそうです<sup>13</sup>。イエスはこう言ったそうです。「娘よ、あなたが信じたので、あなたが私を信じてくれたので、あなたは助かった。安心して行きなさい」と。彼女は体の病が治ったばかりではなく、イエスの言葉と愛を受けて、人としてよみがえったのです。

何の社会的地位も持ちませんでした。人々はイエスを「ラビ」（教師）と呼び、「預言者」と信じました。「生ける神の子」「救い主」と言う人もありました。

けれどもイエスの思いとはまったく違う期待を彼にかける人たちもいました。ある人々は反ローマ帝国のクーデターの指導者として彼を祭り上げようとしていました。ある人々は彼を王として押し立てようとしていました<sup>14</sup>。自分の利益のために彼を利用することを企てる人々も少なくありませんでした。けれどもイエスは、人の心の中に何があるかを知っていました。イエスの願いは、人の心の中に深い安心を、世界にほんとうの平和をもたらすことでした。イエスは人の魂を脅かす力、この世界を損う闇の勢力を見抜いていて、それと対決せざるを得ませんでした。

悲しみや自分の破れを知っている人々はイエスを愛しましたが、反対に自分たちの地位や立場がイエスによって危うくされていると感じる人たちがいました。それは社会的、宗教的指導者たちです。ふだ

---

<sup>11</sup> マルコ 3:34-35。

<sup>12</sup> マタイ 9:20。

<sup>13</sup> マルコ 5:33。

<sup>14</sup> ヨハネ 6:15。

んは反目し合っているファリサイ派、サドカイ派、ヘロデ党、親ローマ派などが、イエスを邪魔者、秩序破壊者として抹殺しようとする点では一致しました。

イエスが公に活動を始めて約 3 年、ある日曜日に、イエスは弟子たちや多くの彼を愛する人々とともに首都エルサレムに入りました。私は胸騒ぎを感じて、できるだけそばにるようにしていました。

木曜日の深夜、イエスは、祈りに行ったオリーブ山のゲッセマネで捕らえられました。すぐに裁判が開かれ、大祭司と議会はイエスに死刑の判決を下しました。「神の子」「メシア」を自称し、神殿を冒瀆し、神を汚した、というのが理由でした。イエスほど命をかけて神と人を愛した人はいなかったのに。

イエスはガバタ（敷石）と呼ばれる裁判の場所から、エルサレムの城門の外、ゴルゴタ（されこうべの場所）という刑場に引いて行かれました。自分がかげられる十字架の横木をかつがされていました。私は大勢の人たちにまじってイエスについて行きました。イエスは道に倒れました。兵士たちは、通りかかったキレネ人にイエスの十字架を無理に担がせました。その人はシモンという人で、後に彼もその妻も子どもたちもイエスを信じる人になったのです<sup>15</sup>。

午前 9 時にイエスは十字架にかけられました。十字架の上には、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いた罪状書きが掛けられていました。

生後 40 日、あの子を抱いて神殿に行ったときにシメオンが言った言葉がよみがえりました。

「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」<sup>16</sup>

胸のつぶれる思いで、私はその近くに立って見つめていました。この子は、「神を冒瀆し、ローマ帝国の支配に反抗した極悪の犯罪人」として十字架につけられた。しかし彼は間違っていない。間違っているのは彼を十字架につけた者たちだ。他のだれが逃げようと彼を見捨てようと、私は絶対にここを離れない。イエスを信じて自分も死ぬなら死ぬと覚悟していました。マグダラのマリアたちが一緒にいました。

突然、十字架の上からイエスが私にこう言いました。「ご覧なさい。これはあなたの子です」。彼が言ったのは、そばにいた弟子のひとりヨハネに対してでした。イエスはヨハネに言いました。「見なさい。これはあなたの母です。」それからヨハネは、私を自分の母のように自分の家に引き取ってくれました。イエスは十字架の上で祈っていました。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」<sup>17</sup>

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」<sup>18</sup>

イエスが息を引き取ったのは午後 3 時でした。私はずっと十字架の下に立っていました<sup>19</sup>。

---

<sup>15</sup> マルコ 15:21。ローマ 16:13。

<sup>16</sup> ルカ 2:34-35。

<sup>17</sup> ルカ 23:34。

<sup>18</sup> ルカ 23:46

<sup>19</sup> ヨハネ 19:25。「立つ」はギリシア語「ヒステーミ」。これは「しっかりと立つ」「屈しないで立つ」「抵抗

夕暮れになったとき、アリマタヤのヨセフがやって来ました。彼は議員で、社会的地位の高い人です。彼はローマ総督ピラトから許可を得て、イエスの遺体を取り降ろしに来たのです。私ははっきり知りました。ヨセフは、自分の社会的地位はもちろん、場合によっては命を失うことも覚悟している。彼は自分がイエスの仲間であり弟子であることを公然と示したのです。この人も神の国を待ち望んでいた<sup>20</sup>。

まもなくニコデモ（この人はファリサイ派の教師で、議員でもありました）が大きな袋を担いでやって来ました。イエスの葬りのために<sup>もつやく</sup>没薬と<sup>しんこう</sup>沈香を混ぜた物を持ってきてくれたのです。この人も自分の身を危険にさらして、イエスの仲間であることをあらわしたのです。

イエスのからだはアリマタヤのヨセフの新しい墓に葬られました<sup>21</sup>。横穴の墓の入口は大きい石で閉じられました。私はずっとその墓を見つめていました。

安息日である土曜日はじっとして過ごし、日曜日の夜明け前、私はマグダラのマリアと一緒に墓に行きました。イエスのからだを油で拭い、葬りなおすためです。入口の石をどうやって取り除いたらよいか分かりませんでしたが、とにかく急いで行ったのです。すると入口の大きな石はわきへ転がしてありました。

死んだイエスは復活しました。私はよみがえったイエスに会ったのですから、人がどう思おうとそう言うしかありません。夢見るような不思議な経験。悲しみは慰められ、絶望は希望に変えられました。打ちのめされた私たちは、溢れる喜びに満たされました。他の弟子たちも同じ経験をしました。

40日後、私たちはイエスに従ってオリーブ山に行き、そこでイエスを見送りました。イエスは手を上げて私たちを祝福し、祝福しつつその姿は見えなくなりました。

私たちはエルサレムに帰り、一緒に毎日祈っていました<sup>22</sup>。私たちは、世間から見れば、死刑となった犯罪人を信じる異様なグループですが、私たちには不思議な確信がありました。神に守られ、包まれ、肯定されているという実感がありました。

10日後の日曜日、私たちが2階の部屋に集まって祈っていたとき、心に風が吹き、火が燃えました。神の慰めが私たちのうちに溢れ、平和が満ち、恐れが消え、すべてから解き放たれて自由になりました。この世界に愛と自由が、正義と平和が実現することを求めて働いておられる神。その神の情熱が私た

---

する」というニュアンスを含みうる言葉。「悪魔の策略に対抗して**立つ**ことができるように、神の武具を身に着けなさい。……邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、**しっかりと立つ**ことができるように、神の武具を身に着けなさい。**立って**、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。」エフェソ 6:11-15

<sup>20</sup> マルコ 15:43。

<sup>21</sup> ヨハネ 19:38-42。

<sup>22</sup> 使徒言行録 1:14。

ちのうちに燃えて、私たちは宣教の歩みを始めたのです。

### マリアの賛歌

わたしの魂は主をあがめ、  
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。  
身分の低い、この主のはしために（も<sup>23</sup>）  
目を留めてくださったからです。  
今から後、いつの世の人も  
わたしを幸いな者と言うでしょう、  
力ある方が、  
わたしに偉大なことをなさいましたから。  
その御名は尊く、  
その憐れみは代々に限りなく、  
主を畏れる者に及びます。  
主はその腕で力を振るい、  
思い上がる者を打ち散らし、  
権力ある者をその座から引き降ろし、  
身分の低い者を高く上げ、  
飢えた人を良い物で満たし、  
富める者を空腹のまま追い返されます。  
その僕イスラエルを受け入れて、  
憐れみをお忘れになりません、  
わたしたちの先祖におっしゃったとおり、  
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」<sup>24</sup>

2006/04/03

---

<sup>23</sup>原文にない「も」は削除すべき。

<sup>24</sup> ルカ 1:47-55。